占領下における明朗時代小説の躍進

――B六判雑誌『読物と講談』と山手樹一郎『夢介千両みやげ』

影山　亮

I

戦後における雑誌変遷の動向には、二つの山があるとされる。一つは敗戦直後、粗悪な用紙を用いたB五判に性的で猟奇的な内容を全面に押し出した雑誌、いわゆるカストリ雑誌の隆盛である。時代が下り、昭和二十七年四月二十八日サンフランシスコ講和条約発効によって占領が終焉を迎えた前後から昭和三十年にかけて、それまでの月刊から週刊へ、判型はB五判もしくはAB判を用いた週刊誌の席巻がそれに続く。これまでの戦後雑誌研究では戦後カストリ雑誌氾濫の後、週刊誌ブームがトピックと考える場合が多い。しかし、この両雑誌の流行の狭間に勢いのあった雑誌コンテンツが存在した。すなわち昭和二十一年二月、公友社から刊行され〝B六判の王者〟と称された『読物と講談』である。

同誌の刊行と人気ぶりには敗戦直後からのカストリ雑誌に食傷ぎみだった読者側の要求と、占領下において事前から事後へと移行した検閲制度の変化への対応を求められた出版社側の狙いが関係していたと想定できる。さらに同誌の看板作品は山手樹一郎「夢介千両みやげ」だった。山手は昭和十四年の「桃太郎侍」（『岡山合同新聞』）連載で注目され、また昭和十九年には第四回野間文芸奨励賞の授賞など、戦時下においてそれなりの評価は得ていたものの、その軽妙さが同時代の大衆文学文壇からは低評価を招く一因となり、くすぶっていたとも言える。そんな山手にとって『読物と講談』に連載された「夢介千両みやげ」の人気ぶりは、占領下における躍進といえる現象であった。著作年譜によれば同作品の連載以後、昭和二十年からの十年間における著作数は昭和十年代と比べ、読切作品が百七十五作から二百二十七作へ、連載作品が十二作から四十九作と急増している[1]。

本稿では、「夢介千両みやげ」の作品読解よりはむしろ同時代においてトレンドだった明るい娯楽雑誌、その代表格であり敗戦直後のカストリ雑誌と昭和三十年代の週刊誌のいわば、あわいの雑誌である『読物と講談』という外枠に重きを置いて論じる。同時にこれまであまり注目されることのなかった『読物と講談』と同誌に連載された「夢介千両みやげ」を一例として、敗戦と占領

下という特殊な状況が、雑誌のあり方、大衆文学のあり方に大いに影響を及ぼした過程を見ることが目的である。

Ⅱ

戦後の雑誌界をまず席巻したのがいわゆるカストリ雑誌と呼ばれる雑誌群である。カストリ雑誌については山本明『カストリ雑誌研究―シンボルにみる風俗史』（昭和五十一年七月、出版ニュース社）をはじめとして、多くの先行研究が存在する。石川巧は「占領期カストリ雑誌研究の現在」（『インテリジェンス』平成二十九年三月、二〇世紀メディア研究所）において、

（1）「猟奇」を原型とした、販売戦略の面において同誌またはその系統誌を模倣していること。（2）エロ・グロ・ナンセンスを基調とした内容であること。（3）非統制のザラ紙、センカ紙で作られた粗悪な雑誌であること。（4）戦前戦中から継続的な出版活動を行ってきた出版社が発行したものではないこと。（5）B五判三二頁～四八頁を基本とすること。（6）創刊から休刊／廃刊までの期間が短く、単発あるいは数号をだして消えた雑誌であること。（7）雑誌の内容や誌面構成等に関する編集作業がほとんど行われていないこと。（8）表紙に「〇月号」などの表記がなく内容においても時事性がないこと。（9）編集部が求める内容の作品を匿名性の高い筆者（その領域に精通した筆者）に書かせていること。（10）作品の内容や質ではなく扇情的な表紙や挿絵で購買欲をそそろうとしていること。

と十の要素を挙げて、カストリ雑誌の特徴を説明している。石川が「原型」と位置づけている昭和二十一年十月に茜書房から発刊された『猟奇』は、宮永志津夫「王朝の好色と滑稽譚」や北川千代三「H大佐夫人」など、性をめぐる科学的理論を掲載する体裁を取っているが、実質的な内容はエロ・グロ・ナンセンスを全面に押し出すものであり、第一巻二号が発禁処分を受けている。カストリ雑誌のほとんどは廃刊までの期間が短かったが、同系統の雑誌が続々と発刊されることによって、雑誌界に氾濫していった。しかし一方でその氾濫ぶりは、徐々に批判の的ともなる。

占領下において出版流通関係記事を多数掲載していた『出版情報』において、

一九四六年の娯楽雑誌界を展望すると、ふるい型の娯楽雑誌は殆ど姿を消して、これに代つて新しい時代の息吹きの中に、戦時中無理にやめさせられた雑誌の復刊や新雑誌が、全く文字通り雨後の筍の始く（ママ）、市井にハンランしてゐる。（略）それは一応よいとして、然し度が過ぎていかゞはしきものが出て来た。中には春画ワイ本を思はせるものさへあつて、心ある人の目をそむけしめるものがある。今や業者自身の中からも出版倫理化の声が昂つて来たが、もとより当然のことである。[2]

左翼出版社とエロ出版社は、日本人が珍気な玩具をよろこ

ぶ子供のやうに左翼物とエロ物に寄集つた異常な時期は熱病のやうに既に終了しようとしてゐることを自覚して、更に健康な世界へ一方全盛んする準備をすべきであらう。[3]

と言及されているように、昭和二十二年には既にカストリ雑誌の氾濫ぶりが問題視され、「健康な」な雑誌が希求されていることが分かる。一方で出版社側は頭を悩ませる事態を迎えていた。すなわち検閲制度の転換である。

川崎賢子は占領下における検閲制度について、

検閲処分に該当することの少ないジャンルの雑誌から徐々に、雑誌刊行以前の校正刷の段階で検閲を受ける事前検閲から、刊行物を提出して検閲を受ける事後検閲へと移行する。一九四八年八月の段階では、ほとんどの雑誌が事後検閲の対象となっており、一九四九年一〇月にはCCDによる検閲が廃止される。[4]

と言及している。同様に紅野謙介は、

事前検閲が当然ながら言論・表現の自由を著しく制約するものであることは言うまでもない。それは不当であるが、しかし、事前検閲があるかぎり、執筆者も編集者も多少の配慮はあるにせよ、その信ずるところにしたがって原稿を書き、校正刷を提示することによって抵触するかどうかを、検閲官に委ねることができる。（略）事後検閲になったとき、この検閲官はみずからの内面に棲むことになる。[5]

と言及し、出版界とジャーナリズムの再編成が、検閲制度の転換とほぼ平行していたと論じている。検閲が事前に実施されるということは発禁等の処分を下す場合、どのような理由なのかを明確にする必要がある。しかし事後検閲の場合はその必要がなく、その基準を曖昧のままにすることができる。加えて既に発行や印刷に資金を投入しているので、出版社にとっては痛手である。そのため昭和二十二年から二十三年における検閲制度の転換で、より細心になった出版社側は検閲に引っかかる可能性が高いカストリ雑誌を敬遠するようになる。カストリ雑誌が蔓延する空気から次の雑誌ジャンル、コンテンツを模索していた出版業界にとって、検閲体制の変化もまた一つのタイミングだったと言えよう。いわばポスト・カストリ雑誌を模索していた出版界では、事後検閲のリスクが少ない、より明るく健全を謳った雑誌を刊行する流れとなった。石川は先に引用した論文で、カストリ雑誌が隆盛を極めたのは「一九四六年一月の『りべらる』創刊から一九四九年九月頃までの約三年半ということになる」とし、「終焉を迎えたことを立証する客観的な根拠のひとつは、B五判とA五判が中心だった大衆娯楽雑誌の領域にB六判が登場したこと」だと述べている。またその嚆矢となった雑誌については「多くの先行研究が一九四九年六月の『夫婦生活』（家庭社）創刊を節目と捉えている」とし、それに同調しながら「主に成人男性がひとりでこっそりと耽読することを前提とするカストリ雑誌」から「夫婦や愛人同士が寝室で一緒に読んでお互いの刺激を高めていくことを狙いとす

る夫婦和合雑誌、性科学雑誌へとシフトしていくのである」と言及している。石川はカストリ雑誌終焉に関してB六判という判型とエロ物というコンテンツの変遷とを結びつけて論じている。だとすればカストリ雑誌が連載作品を継続的に読むことをほとんど想定せず、秘かに読むことが主であったのに対して、連載作品の掲載など内容が継続的で、書棚に並べやすくゆっくり読むことに主眼を置いたB六判という判型で、尚且つ背表紙があるという点に注目したとき、カストリ雑誌の終焉と時節を同じくして流行した、明るく健全な娯楽雑誌の存在が浮上する。その雑誌こそ『読物と講談』であった。

Ⅲ

ポスト・カストリ雑誌としての雑誌コンテンツが希求され、新たなトレンドを形成した例としては、昭和二十一年十一月に発刊した第二期『苦楽』（苦楽社）が挙げられる。大正十三年に直木三十五らによって創刊されたのが第一期『苦楽』であり、同誌の寄稿者でもあった大佛次郎を中心に戦後復刊したのが第二期『苦楽』である。

「苦楽」は時世に腹が立つたから出た雑誌だと、お考へ下さつていゝ。（略）「苦楽」は青臭い文学青年の文学ではなく社会人の文学を築きたいと志してゐる。[6]

苦楽は、かたい、と云ふ評も耳に入る。これは娯楽雑誌だといふ先入感があつて出た言葉であらう。苦楽は娯楽雑誌ではない。[7]

と編集後記に掲げていた同誌の内容は、白井喬二や大佛次郎、長谷川伸など戦前、戦時下に活躍した時代小説家の時代物がほとんどだった。つまり娯楽雑誌とは一線を画すという宣言は、主に中年以上の男性を対象読者に想定したものと読み換えることが可能であろう。判型をA五判に変え、中身もカストリ雑誌とは異なった読物中心の誌面構成だった『苦楽』だが、想定している読者層が男性読者に限定されている点では、カストリ雑誌と共通性、連続性を持っていたと言えよう。

一方で女性読者を対象に想定したポスト・カストリ雑誌としては『ロマンス』（ロマンス社）が挙げられる。

新しい民主日本の夜明けとともに、ロマンスは生れる。過去の生活から封建的な悲劇や喜劇をすべて払拭した、明るいすがくしいこの産声を聞いてくれたまへ。[8]

雑誌「ロマンス」は、（略）創刊以来「明るく楽しく、大衆に愛される」をモットーにして、読者層は、男にも女にも、年寄にも若いものにもと一般大衆をねらつて、一家団欒のかてとならうとしてゐる。従つて同誌には、売らんかなのアクドイエロやグロは見当たらない。健全なる娯楽読物を目指して、奇矯をてらはず、地味に真直ぐに大道を歩いてゐる。[9]

昭和二十一年六月に創刊された『ロマンス』は、同時代に氾濫していたカストリ雑誌とは一線を画した「明るく楽しく、大衆に愛される」ことをモットーにした雑誌だった。誌面は一巻二号の冒頭に島崎藤村「めぐり逢ふ　君やいくたび」（『落梅集』）を掲載し、菊池寛や小島政二郎、吉屋信子などが長期連載している。その他の小説も女性を主人公にした現代小説が中心である。また女性のファッション記事や写真、海外の映画情報も併せて掲載されており、婦人雑誌の毛色もあった。しかし判型はカストリ雑誌の象徴ともいえるB五判であり、カストリ雑誌的性格が残っているとも言える。このようにエロ・グロ・ナンセンスを基調とした内容や、B五の判型、表紙や挿絵が性的に特化し扇情的だったカストリ雑誌とは明らかに異なる編集意図を持ったポスト・カストリ雑誌を、各出版社が模索していたことは明らかであろう。そのようなトレンドのなかでも特筆すべき人気を博した雑誌が『読物と講談』だった。

『読物と講談』は大正期に読物と講談社から創刊されたことが推定される雑誌だが、正確な資料は残っていない。末永昭二は「『読物と講談』は、正確には大正二年に創刊された読物雑誌の老舗[10]」と言及しているが、いま手元にある戦前の巻を見ると昭和十五年十月号が二十九巻十三号となっている。一年に一巻進むと仮定すると、その創刊は明治四十五年ないし大正元年となる。この戦前版は昭和十九年に三十三巻をもって休刊されるが、本稿で取り扱うのは戦後に復刊したものである。戦後、昭和二十年十一月に婦人画報出身の井上正也が東京都中央区銀座西二丁目に公友社を創立し、翌年四月に月刊誌として『読物と講談』を創刊した。戦前に存在した雑誌のタイトルを新興の会社がそのまま借用することは珍しいことではなかったし、また戦前版の広告欄を見ると、担当している会社が広友社とあり、戦後版の版元である公友社と何かしらの関係があると推定される。創刊から作家としてかかわっていた城戸禮は、

> 昭和二十年の暮れも押し迫った頃、「ソウダンアリ　シキウオイデヲコウ」〝カトウ〟そういう電報が、私のところへ舞いこんできた。（略）実は、雑誌を出そうと思っているんですよ、それも大至急にね」（略）その人は、かつて婦人画報の部長をやっていた井上という人物であった。（略）この雑誌がいまでも相当の読者は覚えていられるかもしれないが、それから数年間小型本（B六判）の王者といわれた〝読物と講談[11]〟。

と回想している。実際、井上という人物を紹介された城戸らは、創刊号から四号までの原稿を提供した。創刊号の「編集だより」には、

> 誰方にも、理屈ぬきで、たのしく、明るく、どこからどこまで面白い雑誌――（略）「読物と講談」はこれからもどこまでも内容本位で、平明で、たのしい「皆様の雑誌」です。[12]

とあり「誰方にも」「明るく」「内容本位」な雑誌を目指すことを宣言している。「よみこう」と愛称を付けられた同誌は、創刊号

からしばらくの間は城戸のほかに、村上元三らが作品を掲載していたが、その後は山岡荘八の時代小説や五代目神田伯龍の講談なども掲載されている。また内容だけでなく、表紙でも他誌との差異をはかっていた。

加須駅の売店に、当時の印刷用紙割制限六十四頁の雑誌だったが、B六判で、これは仮造本単色刷が多かった当時としては、カラー写真で、日本人形の目にやわらかで溢れるように鮮やかな表紙に飾られた『読物と講談』創刊号が出た。（略）その色刷りに平和が還ってきたようななつかしさにひかれて、並んで、ぼくも毎号買った。[13]

共紙の表紙で仮綴じのカストリ雑誌とは異なり、四色刷りで岡本玉水製作の「玉水人形」のカラー写真を表紙に採用した戦後版『読物と講談』は、その珍しさと懐かしさによって目を惹いた。一方で戦後も昭和二十三年頃になると大衆雑誌界に不況が押し寄せる。

編集者A　いよいよ不況来だね。新宿や銀座には秋口から十円の投売りが始まつたね。

編集者B　散歩に出かけてね。投売りの店を通る時は思わず立ち止るよ。うちの本が万が一出てはしないかとね。ズラリ見渡して、ない時はホツトするね。定価三十円とか二十五円というのが十円で投げうりされているのをみると、他人事ながら涙が出る。特に大衆誌は、表紙が女の顔のハデなやつだけに、街頭にさらされてる姿はそぞろ哀れを止めるね。

（略）

編集者B　不況の原因は金づまりかね。

編集者A　一般的にはそうだろうね。もう一つは一種の大衆雑誌における安定恐慌が始まつたのではないかね。僕はそれをこの秋を以て開始期とし、来年の上半期を以て決戦期とみる、ピークはだから正月号、と春の増刊号だ。

編集者B　その安定恐慌とは何だね。

編集者A　大衆雑誌として出るべきものは一応出つくしたというのが今日ではないか。終戦直後のゴタゴタで大量に紙を手に入れた連中の雑誌も、もう出つくしたろうし、大衆誌の型、ジヤンルとしても、大体考え得られるものは殆んど全部出揃つている。[14]

これは昭和二十三年の大衆雑誌界を、対談形式で回顧した記事である。売れない大衆雑誌の投げ売りが始まったこと、その原因が金づまりと、大衆雑誌としての型やジャンルが出尽くしたことによる「安定恐慌」であると言及している。また投げ売りの対象になっている大衆雑誌の表紙が「女の顔のハデなやつ」とあることから、カストリ雑誌、もしくはその毛色が多分に強い雑誌と考えられるだろう。ではその不況のなかで戦後版『読物と講談』の売行きはどうであったか。

二年も経たないうちに、当時としては破天荒な二十万部という発行部数を誇るようになった。（略）そうこうしているうちに〝読物と講談〟の売れ行きが、ぐんぐんと上昇の一途を辿りはじめた。[15]

先に挙げた城戸の回想によれば、昭和二十三年前後には発行部数が二十万部を超えていたようだ。その好評ぶりの一端は読者からの投稿コーナーである「愛読者ルーム」からうかがい知ることができる。

表紙の玉水人形は貴誌ならではの高尚な趣味だと感服しています。本当に健全な家庭の雑誌として益々記者諸君の健闘を祈ります。（山形・尾山信三）[16]

闇とインフレの世の中にせめて娯楽をとなると、やつぱり映画と雑誌である。夥しいカストリ雑誌の中に御誌は断然我々若人に真の面白い読物を提供してくれる。（鎌倉・ひー坊）[17]

エロ雑誌カストリ雑誌のハンランの中で、「読物と講談」は安心して家庭へ持つてみんなに読ませられる雑誌であると思ふ。（大阪・長井隆助）[18]

復員以来、ケバケバしている雑誌の氾濫に呆れて、今日迄ほとんど雑誌類には目もくれませんでした。先日駅の売店で、フト！可愛いゝ人形の美しい表紙の三月号が目に止り、頁を開き見て、内容の充実して良心的であるのに、さつそく買い求めました。父もチヨイチヨイ読むらしく、時々大きな虫眼鏡が挿み忘れているのです。（新潟・山口等）[19]

これらの投稿から戦後版『読物と講談』の読者が同誌を愛好する要因が、同時代に氾濫していたカストリ雑誌への食傷と忌避、それと一線を画して「健全」「良心的」で、「安心して家庭へ持つてみんなに読ませられる」点にあることが分かる。また読者を限定せず、家族全員が読める内容も好評だった。

友の会ニュース　読講の愛読者で文芸好きの、私の町の有志で「愛好会」を結成しました。読講の文芸欄へ投稿して、入賞になつた者には、賞として読物と講談を三ヶ月分無料で愛読させる組織になつてゐます。（略）面白い楽しい明るい家庭の燈明として永く愛読を続けたいと思います。（新潟県燕町下学校町・斎藤静江）[20]

愛読者の有志で結成された「よみこう友の会」は新潟だけでなく、東京や神奈川、岡山、和歌山、福島、兵庫などでも結成されていることが確認できる。その事態を知った公友社は、濃緑に愛らしい雛人形が浮彫になっているデザインの「愛読者バッチ」を製作し、希望者に配布する企画を考案した。この企画は読者を選ばず、安心して家庭に持ち込める『読物と講談』だからこそ、愛読者であることを隠すことなく、表立って集えるからこそ成り立

つものだ。持ち運び、ないし本棚に並べることを想定した背表紙付きB六判という判型、カラー写真の表紙、ポスト・カストリ雑誌を希求した読者に応え得る「健全な家庭雑誌」を目指した誌面構成と企画、これらの要因が全てとは言えないが、不況の波が押し寄せていた大衆雑誌界のなかで、戦後版『読物と講談』の発行部数を二十万部越えの売り上げたことは事実である。そのなかで同誌を〝B六版の王者〟たらしめた最大の要因と考えられるのが、同誌に長期連載された小説、すなわち山手樹一郎「夢介千両みやげ」であった。

Ⅳ

木々高太郎は昭和二十一年の大衆文学界の概観について「注目す可き三つの現象」を挙げている。すなわち「探偵小説の興隆」、「大衆文芸と純文芸の区別」が無くなりつつある点、そして

> 進駐軍司令部より、軍国的封建的の文化の一掃の意味から歌舞伎台本半ばが禁止せられると共に、封建的歴史小説、股旅もの等が殆ど禁止に近い処置がとられたので、大衆小説の大半を占めてゐた、時代小説は殆ど潰滅して了つたことである。[21]

という「時代小説の変貌」である。終戦後GHQは教育文化政策を担当するCIE（民間情報教育局）を設置し、さらにCCD（民間検閲支隊）も置いた。CIEから日本映画に対し十三の規制項目が提出され、日本刀を振り回すチャンバラ剣戟は軍国主義的であり『忠臣蔵』などの敵討ちなどはアメリカ合衆国に対する敵対心を喚起する要素がある映画と認識され製作が制限された。それは時代小説にも多大な影響を及ぼし、戦前からいわゆる「ニヒル剣士」で活躍していた時代小説家たちにとって、チャンバラ抜きの時代小説を実際に書くことは容易ではなかったし、昭和二十三年頃になるとその様相が目立ってくる。

> 吉川英治、白井恭二、長谷川伸、大佛次郎。注目に値する業績なしであつた。（略）吉川は『高山右近』と『大岡越前』を一応完結した。二作ともこれまでの吉川の業績にくらべて、すぐれてゐる作ではない。長谷川伸は『日本捕虜志』といふ手間のかゝる仕事をしたが、小説ではなかった。大佛次郎は時代小説から手を引いてゐるやうである。[22]

> 量的に、または質的に最も注目すべき作品を発表したのは、村上元三、山岡荘八、山本周五郎、山手樹一郎等の諸氏であつて、この人々の中には、その力量に於て既に既成大家の域を遥に高く抜いてゐる人もあり、時代は既に移つてゐるといふ感じと一緒に、次年度のこの人々の活躍は大いに期待されると思ふ。[23]

戦前から第一線で活躍していた時代小説家たちは、占領下において要請されたチャンバラ抜きの時代小説に明らかに手こずっていた。例えばかつて時代小説、歴史小説の総本山だった第三次『大

衆文芸』（新小説社）にも目を向けてみると、長谷川伸「足尾九兵衛の懺悔」（昭和二十一年一月）相澤徳之進「蝦夷の竹枝」（昭和二十一年一月）土師清二「あの男」（昭和二十三年三月）など、チャンバラシーン抜きで過去の遺恨を解決する人情噺のような作品がほとんどである。また戦時下で文壇から高い評価を得ていた『文学建設』一派の海音寺潮五郎は、歴史小説を書けず中国の伝奇ものを翻案しながら、次第に王朝ものに転じていった。一方で戦時下はもちろん、元来チャンバラシーン抜きの時代小説を得意としてきた山手にとっては、占領下における制限は何ら窮屈ではなく、既成大家から時代が移ってきた作家の一人に挙げられている。ここに時代小説界における世代交代を見ることが出来るが、それについては別稿で論ずる。占領下における時代小説の要請に見事に応えた山手作品であるが、その象徴的作品が戦後版『読物と講談』に長期連載された「夢介千両みやげ」であった。

「夢介千両みやげ」は昭和二十三年二月から昭和二十六年一月にかけて、「続　夢介千両みやげ」は昭和二十六年六月から昭和二十七年六月まで連載された。夢介は小田原の豪農である父親から、千両を使って江戸で道楽修行してこいと言われる。その道中、美人道中師のお銀と出会い恋仲になる。江戸では宿敵である大垣伝九郎をはじめ様々な敵や、災難に巻き込まれながらもその豊富な資金と土下座、最後の手段として怪力を使って解決していく。やがて夫婦になることを父に報告するため、小田原への帰路につくというあらすじだ。山手自身は

以前から時代小説で、なにか新しいユーモア小説はできないものかと考へてゐたが、終戦後われ人共にあまりにもせち辛い世相を見せつけられて、こんな時代にこそのんびりした楽しい小説を書いてみたいものだと切実にその感を深くし、大人の童話のつもりで書き出したのが本篇である。[24]

と作品言及をしている。本作の特徴は他の山手作品にも見られる敵を斬らない主人公であろう。

いきなり、ぜんを足げに、さら小ばちがガラガラと砕けてけし飛ぶのかと思われた一瞬、夢介の手がヒョイとその足くびをつかんでいた。「アアッ」悲鳴をあげてゆがんだお化け岩の顔から、たちまち血のけがひいた。ウウウッと身をもみ、からだをのけぞらせ、やがて夢介が手を放してやると、ドスンと、くずれるようにしりもちをつく。[25]

「つまらない力なんか出すのじゃなかった」生まれつきの怪力をかたわのように恥じ、人にかくしている夢介であった。力など自慢するのは、男の中でもいちばんくずな男です、子どものころたびたび母親からしかられて、いつもはやさしい母が、その時だけは一日じゅう決して口をきいてくれない。[26]

大垣伝九郎としては、顔にかかわることだろうし、今後の仕事のじゃまにもなる。そう思ってたくらんだ仕返しだろうが、こっちはむろん、そんなけんかを買う気はない。ただあやまって、金ですむことならさいわい、きょうは露月町の伊

勢屋からとってきた百両が、手つかずにふところにある。これをみんなさし出しても、お銀のからだを無事にもらってこよう。[27]

終戦後、世相の暗さから「のんびりした楽しい小説」のつもりで書いた夢介は、豪農の息子であるため帯刀しておらず、作中で刀を抜くことはない。また基本的には敵に逆らわず、その怪力を発揮したときも決して敵を殺さず、傷つけたことを悔いている。それ以降は、豊富な資金の一部を相手に払って争いを避けたり、相手に頭を下げることで問題を解決しようとする。この刀や武器を持たずに相手を傷付けない、つまりチャンバラシーンのない時代小説という特徴は、先に記したように、占領下における時代小説の要請に応え得るものだった。

戦前から第一線で活躍していた長谷川や、大佛の作品に対してほとんど反響がないなかで山手の「夢介千両みやげ」への反響は凄まじいものだった。

小生は夢介の支持者に御座候。まことに痛快、真にユーモラスな時代小説として近来の好読物。我々中老の熱心な読者もあることをお知らせしておく。（鹿児島・島井長三郎[28]）

私もやつぱり夢介ファンよ。だつて男性的で親切で謙遜家で、とても素敵！こういう男の人が現代でも居てくれたらば、どんなにいいでせう。（金沢・宮野春子[29]）

私の家では家族全員が夢介ファンです。（略）これは私の家だけでなく、全国の読講愛読者の家庭は皆同じ事と存じます。（新潟・山下アサエ[30]）

「私は十九の乙女ですが、ぜひ、先生の夢介さんのようなお婿さんをお世話下さいませ」とありました。先生「これはいよいよ小説だけでなく、読者の皆さんに、夢介のようなお婿さんだのお銀さんのようなお嫁さんをお世話しなければならなくなりそうだね」と困つたような嬉しいような顔。[31]

以上は戦後版『読物と講談』の「愛読者ルーム」に投稿された読者投稿の一例である。読者投稿を見ると「夢介千両みやげ」の人気ぶりには男性だけでなく女性からの反響が多いという特徴が分かるだろう。また老若男女問わず、家族全員が読んでいたということも注目すべき点である。先に述べたように戦後版『読物と講談』という雑誌自体が、明朗で家族全員で読めるというコンセプトだった。同誌に連載された「夢介千両みやげ」は占領下における時代小説の要請に応えただけでなく、同誌のコンセプトにもまた合致した作品であった。読者からの大きな反響に、同誌の編集も「夢介千両みやげ」を特別な作品として認知していく。

本号から本文九十六頁になりました。正にB六判大衆雑誌のトップ。（略）近来の好読物として毎号皆様お待ち兼ねの山手樹一郎先生の「夢介千両みやげ」本号はその第四話でございます。号を追つて高調してゆく面白さは、十分皆様の御

期待を満たすと存じます。[32]

新年号は特別増大号として、いよいよ皆様の御愛読誌としての真価を発揮しようと企画進行中です。山手樹一郎先生の「夢介千両みやげ」第十三話七十枚の一挙掲載などもその一つ。全国夢介ファンの皆様がアッと喜んで下さることゝ存じます。[33]

これらの反響以外にも、昭和二十六年十月号が「夢介千両みやげ」休載であったのに対して、「落丁かと思いましたが、目次にもないので、ほんとに残念でした」[34]と苦情が投稿されるほどであった。つまり限定された読者向けカストリ雑誌に対して、「夢介千両みやげ」連載後からの『読物と講談』は、家族全員で同作を読むために購読されていたと言っても過言ではない。言い換えるならば、人気雑誌『読物と講談』に連載している「夢介千両みやげ」、人気作品「夢介千両みやげ」を連載している『読物と講談』といったように、雑誌メディアと掲載作品が相互作用的に人気を増幅していったと考えられるだろう。城戸も、

そうこうしているうちに〝読物と講談〟の売れ行きが、ぐんぐんと上昇の一途を辿りはじめた。私たちが書きはじめてから一、二年ほどの間に、大林清氏や山岡荘八氏も書きはじめ、それに山手樹一郎氏が〝夢介千両みやげ〟を連載しはじめたからであった。（略）山手氏が書き出してから、発行部数は三十万部をこえ、いまや〝読物と講談〟は小型雑誌界の王者格にまでなり、まさにあたるべからざる勢いであった。[35]

と、「夢介千両みやげ」の人気によって、発行部数が三十万部を超えたと回想している。創刊から二年で二十万部を誇っていたが、その発行部数のさらなる増幅の一因となったのが、「夢介千両みやげ」であったことは明白であろう。大衆雑誌の世界では、売れない雑誌が次々に投げ売りされる同時期において三十万部という売れ行きを誇り、『読物と講談』は「小型雑誌界の王者格」にまで上り詰めた。その人気と売れ行きにあやかり、『読切読物』（日本文華社）『ポケット講談』（青燈社）『講談世界』（奈良屋書房）『講談と小説』（春光社）『花形講談』（双葉社）『講談と娯楽』（須田町書房）など、次々とB六判で明るく健全な娯楽雑誌が刊行されていく。そのほとんどに山手は作品を掲載している。まさにB六判の明るく健全な娯楽雑誌という枠組みで、山手作品は非常に重宝されていたということだ。そしてこの看過することができない相互的人気には、どちらも占領下という特殊な状況によって要請された雑誌メディアのあり方と、時代小説のあり方に見事に応えたという背景があった。

V

山手は山岡荘八らとの「緑蔭放談集」（『大衆文芸』昭和二十一年六月）において「日本人全体の眼がいま真剣に農村へ集まってゐるんだ」と食糧難にあえぐ都会とは異なり、力があるという地方の農村に注目していた。その着想のもとに豊富な資金を携えて、

小田原から江戸を訪れる「夢介千両みやげ」は、人気を博して山手は見事に躍進を遂げた。都会でなく、地方の農村に着目するというモチーフは戦後の時代小説のモチーフ群の中でどのような意味があったのかは、昭和三十年代以降の剣豪ブームと併せて考えるべき問題であろう。

一方で雑誌メディアに目を向けると女性誌の週刊誌化や、新聞社を母体とした週刊誌が数多く刊行され、週刊誌ブームが到来する。安価でグラビアや時評、創作が合わさった誌面構成で、判型は再びB五判もしくはAB判が主流となる。かつて〝B六判の王者〟と称された『読物と講談』も、週刊誌ブームにはなす術がなかった。昭和二十九年四月に出版社の名が芸文社に変わると、誌面の内容も映画や芸能情報などが創作と並ぶようになり、週刊誌の二番煎じの様相を呈していく。「家族全員で読める」「明朗」というセールスポイントを失った同誌は、次第に忘れ去られていく。一方で人気作家の仲間入りを果たした山手は週刊誌にも作品を連載し始め、山手作品はさらに読みやすく、読者層が広がっていく。石井冨士弥は左記に引用した文章において昭和二十年代後半から三十年代後半を、山手作品があらゆる雑誌で読める時代になったとして、「山手樹一郎作品の氾濫時代」と述べている。しかし山手の氾濫ぶりは石井の言及した程度を遥かに凌駕していた。週刊誌ブームや貸本界での人気によって作品がどこでも読めるだけでなく、多い時には一年に六本も作品が映画化される状況が数年にわたって続く。それだけでなくラジオやレコード、舞台化などあらゆるメディアで山手は引っ張りだこになる。つまり作品の氾濫時代でなく、作家名そのものの氾濫、すなわち「山手樹一郎氾濫時代」が到来することになる。その「山手樹一郎氾濫時代」を迎えるスプリングボードとなったのが、カストリ雑誌と週刊誌という戦後における雑誌変遷の大きな山の狭間に存在した、B六判雑誌『読物と講談』の刊行と、同誌への「夢介千両みやげ」連載であった。

注

(1)『新・山手樹一郎著作年譜』およびその制作過程」(『立教大学大学院日本文学論叢』平成二十五年十月、立教大学大学院文学研究科日本文学専攻)

(2)「各社の動き」(『出版情報』昭和二十二年一月、日本宣伝社)

(3)春日放庵「雑誌戦の将来」(『出版情報』昭和二十二年三月)

(4)川崎賢子「GHQ検閲の終焉と冷戦構造浮上のはざまで」(『占領期雑誌資料大系　文学編Ⅳ』平成二十二年五月、岩波書店)

(5)紅野謙介「文芸雑誌の諸相――検閲転換期のなかで」(『占領期雑誌資料大系　文学編Ⅴ』平成二十二年八月、岩波書店)

(6)「編集後記」(『苦楽』昭和二十一年十一月)

(7)「編集後記」(『苦楽』昭和二十二年一月)

(8)「ロマンスの誕生―創刊のことば―」(『ロマンス』昭和二十一年六月)

(9)「各社の動き」(『出版情報』昭和二十二年一月、日本宣伝社)

(10)末永昭二「戦中雑誌と消えた作家たち――雑誌『読物と講談』、『共楽』」(『彷書月刊』平成十三年十一月、彷徨舎)

(11)城戸禮『風よこの灯を消さないで』(昭和三十八年三月、集英社)

(12) 「編集だより」(『読物と講談』昭和二十一年二月)
(13) 石井冨士弥「娯楽小路の物語師(1)山手樹一郎・この作者と読者の共同作業の世界」(『小説会議』昭和五十六年十一月、同人会)
(14) 扇谷正造「大衆雑誌界の回顧」(『書評』昭和二十三年十二月、日本出版協会編集室)
(15) 註(11)に同じ。
(16) 「愛読者ルーム」(『読物と講談』昭和二十三年九月)
(17) 註(16)に同じ。
(18) 「愛読者ルーム」(『読物と講談』昭和二十三年十月)
(19) 「愛読者ルーム」(『読物と講談』昭和二十七年五月)
(20) 「よみこう友の会」(『読物と講談』昭和二十五年八月)
(21) 木々高太郎「大衆文芸の概観」(『文芸年鑑』昭和二十三年九月、桃蹊書房)
(22) 土師清二「時代小説について」(『文芸年鑑』昭和二十五年六月、新潮社)
(23) 角田喜久雄「時代小説の展望」(『文芸年鑑』昭和二十四年九月、新潮社)
(24) 山手樹一郎「解説」(『新大衆小説全集　第九巻』昭和二十五年一月、矢貴書店)
(25) 山手樹一郎『夢介千両みやげ　上下』(平成七年十二月、講談社)
(26) 註(25)に同じ。
(27) 註(25)に同じ。
(28) 「愛読者ルーム」(『読物と講談』昭和二十三年九月)
(29) 「愛読者ルーム」(『読物と講談』昭和二十三年十一月)
(30) 「愛読者ルーム」(『読物と講談』昭和二十五年五月)
(31) 「編集日記より」(『読物と講談』昭和二十五年九月)
(32) 「編集だより」(『読物と講談』昭和二十三年六月)
(33) 「編集だより」(『読物と講談』昭和二十四年十二月)
(34) 「愛読者ルーム」(『読物と講談』昭和二十七年一月)
(35) 註(11)に同じ。

付記　本稿は日本文学協会第三十七回研究発表大会(平成二十九年七月二日、於新潟大学)での口頭発表に基づく。会場内外に於いて、ご教示くださった方々に深く感謝申し上げる。

(かげやま　りょう　本学大学院博士後期課程)